

岩崎灌園のシーボルト関係手稿

矢部 一郎

東京国立博物館に「帝室本」と称する大量の蔵書がある。その内容を知るには『国書総目録』、森鷗外の「帝室博物館書目解題」によるほかなかつた。帝室本には、医学書、本草書が非常に多い。最近、本草書に関しては、佐々木の書誌学的文献学的論文によりかなり明らかになつた。^(三) 筆者は、東京国立博物館において、岩崎灌園（一七八六—一八四二）の自筆稿本『本草図説』七八冊（附録とも）、写本『岩崎灌園遺稿』一一冊などを閲覧する機会を得ることができた。

帝室本は未整理であり、そのため利用しにくい状況にあり、まして複写などは許されていない。こういった状況であるが、幸運にも、閲覧できた灌園の手稿中に、シーボルト関係のもの二編を見ることができた。文政九（一八二六）年、シーボルト Philipp Franz von Siebold, 1796—1866 の江戸参府の折、灌園は江戸でシーボルトと面会している。その際、灌園はシーボルトに、自然物のラテン名（学名、属名）やオランダ語名について質問している。この二編は、それを示すものである。

幕府の徒士で本草家であつた灌園は、本格的な彩色日本植物図譜『本草図譜』九六卷（天保元—弘化元年、一八三〇—四四刊）の著者である。『本草図説』は『本草図譜』の草稿といふべき性格

のものであるが、今迄その内容はほとんど知られていなかった。しかし、佐々木によってその内容が明らかとなつた。^(三) しかし、附録の「雑纂」五五丁については、内容が示されていない。この中にシーボルト関係手稿が載せられている。

この手稿を見る機会を与えられることは少ないと思われるので、筆者が手写したものを紹介したいと思う。手写のため、誤りもあることを承知されたい。

文政九丙戌年三月下旬ヨリ四月十日迄荷蘭醫師シイボルトニ
盆種ヲ見セ鑿定シ印蘭ノ紙エ自筆ヨコ文字ニシテ記シタル品物
也

岩崎常正

草類	カハミドリ	アンドウルン	羅甸メンタルビナ同
藿	香唐舶来 アラハ	不詳	
ムラサキヤモト	同	同	上フエンニケル 不詳
シカナ	同	同	
ハリブキ日光産	チュシラーゴ		
ツルカメバサウ	ピコシヤ		
ヤクルマサウ	不詳		
狗舌草千辨ノ物	シ子ラリヤ	ヤボニカ	
福寿草長嶋千辨	リドニイ	ホルゲンシイ	

竹葉延胡索

漢種蘭茹

青根カツラ骨補ノ一種
ホルト所望

大葉川芎

白根アフヒホルト所望

アサギリサウ

ヲニウド常磐八丈草ト云

イハチドリ君カ代ト云

キケマン

ヒメシヤガ

硫球紫花半夏

牛扁レイジンサウ

薄バ細辛

延胡索

ヲダマキ

マイヅルサウ

ダンドク

ムカゴニンジン

金レイ花シホル所望

ハマヲモト

ハブサウ

馬蹄決明

ミツモト狼牙

水前草

ユレイタリス シ子ウシス
エウホルビヤ

アルテミシヤ

不詳

ヲレイデア

コリダリス毒アルヤ不詳

イリスシペリカ

ストリユム

コロトン

ストサリユム カナデンセ

ヲレイダリス テキユムベンス

アクウエリギヤ シペリヤ

マサンフエニユム ペボリユム

カンナ インデカ薬効ナシ

ヤボキニユム功ナシ

蘭ニナシ

コリニユムゼーアユエン或ハサフランニ
充ルハ非也

カシヤア之類センナニ非ス

カシヤア

毒アルヤ不詳

不詳

ダンキク

ナベワリサウ

イケマ

ハスノハカツラ防已類

廣東人參

シユム

ムカゴ人參ノ類ニ非ス

ボルト云唐ノ人參ノ属ニ
テタ、花ノ茎短キヲ異トス漢土朝鮮等ハミナ花
ノ茎長シヨツテ荷蘭ノ書ヲ出シ図ヲ我ニ示ス

廣東人參ノ図如此ヨツテ常正按スルニ吉野直根
人參ノ属トシテ可ナリ三七根或ハムカゴニンジ
ンノ属ニ充ルハ大ナル誤ナリ

升麻一種草津産葉ハ白根葉ニ
似テ花白ホヲナス

過藍菜
テラスビ

鶴ラン琉球

荷蘭ニナシ

ニプ EAN

蓮

地黄

宮人草

木類

圓葉桂

素馨

榕樹カツマル

バンシロウ

サビナ荷蘭ヨリ以前渡ル

ミツテルリーデス

不詳

蘭ニナシメオアカンナニ非ス

メイニシペルムン

シユム

ムカゴ人參ノ類ニ非スボルト云唐ノ人參ノ属ニ
テタ、花ノ茎短キヲ異トス漢土朝鮮等ハミナ花
ノ茎長シヨツテ荷蘭ノ書ヲ出シ図ヲ我ニ示ス

廣東人參ノ図如此ヨツテ常正按スルニ吉野直根
人參ノ属トシテ可ナリ三七根或ハムカゴニンジ
ンノ属ニ充ルハ大ナル誤ナリ

升麻一種草津産葉ハ白根葉ニ
似テ花白ホヲナス

過藍菜
テラスビ

鶴ラン琉球

荷蘭ニナシ

ニプ EAN

蓮

地黄

宮人草

木類

圓葉桂

素馨

榕樹カツマル

バンシロウ

サビナ荷蘭ヨリ以前渡ル

不詳

ユニペリユス

ユニペリユス



ハマビハ桂寿果
膽八樹

竹 栢ナギ

仙人掌

ミツデ

トウツガ

クサリ杉

イヌグス

木香花

シヤリンバイ

ケイマ

木豆

ナ、カマド

フジキ子ムノキ

釣 藤

石寄生

壩齒花ムレスズメ

ミツバウツギ

ワンジユ

細葉天仙果

クストキ

ヤナギイチゴ

食茱萸

トメツキス ヤボニイカ

アルエアルピユスヤボニイカ羅旬

ヲレイフボーム子ノ油ヲヲレイフヲーリート云

ナゲヤ ヤボニカ

ビユーンウエイデ

アラリヤ

蘭ニナシ

エウブレサス ヤボニカ

カンブルボーム

ロウザ蘭ニテ上品トシ薬用ス

コラターガス

不詳

ヘデイサリユム

ソルビユス

ソルビユ

蘭ニナシ

蘭ニナシ

アノニスノ一種根モ功ナシ

プマルタ

ハウヒニヤア

ヒクユス

不詳

ムールベシインノ類

イチゴ

ハラーカノ類

シロモジ一名ウコンバナ

蘭人シイボルト日本道中ニテ良薬アリト云神經ヲ強壯ニスル大効アリ

榕ノ一種チンカウボク

ヤシヤヒシヤク日光

探春花琉球ワウ梅

白ヤマブキ

カハクルミ混糞麝香

ヤウロツハニテマンナヲ採ル木ナリト云 甘露蜜ニ充ルモノナリ

ウミホウツキヨナキ貝ノ子

也ト云鎌倉ニ多シ

ストラールステイン

又アスフスト鉄ト硫黄ト銅トニテデキタルモノ也

ソイフルゲールス

日光ヨリ出ル火打石ニ似テモロキ物

アラレ石

万金丹石

スタールス

ティン

摩尼珠蘭ニテヒ

イドロニテ作りタルモノナリ

ゼンガサムシ

和ノ斑猫タイドウトワリ

サツサfras

フイーグス

リーベスナラシ、カ

ヤスミニユム

ユルヒラールスノ類

フラックセニウース

蘭説不詳

エルーテンスティン 鉄氣ヲ帯テナル

コ、イアールド

ケレーアードル

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター

カンターリスノ類トス

カアツツター



(四)
此ヨリ下設薬公質問石薬也ヒルヘル答

竹葉紋石

ケイスシキルヘル
メツトフランドン
ペトシヒシルト

木化石

ホーリステーン

石蟹

ペトレヒシルテ
ケレフト

鮓 蟹

ベソアルステーン

鷄冠雄黃

ロードレアルガル

天狗ツメ石

アラセニウ
子ーゲンセ
スツクデーレン
エハンエン
デルチクデーレ

コハメシ石

ガラニトメツト
エエンペトレハクト
ベルグケレイスタル
インエ、子ギブスニール

陰陽石

ケイスステーン
エン
ガラウワツケ

虎 珀

グーレパルンステーン

水晶含金牙者

ベルグキリスタル
メツト
スツフルロドエン
スワーフルエイセル

方解石

ラウテンスパート

石 螺

カルクスバート
ペトレハクト

黒石英

ベルグキリスタル

アラレ石子ツミ石

エルウエンステーン
オイトヘーテプロンチン

青瑪瑙

カル口ド
クワルツ
アガート

磁石、石蛤、ソロバンメノウ、ユタマ石、琅玕類三品、雲母、

松石、木葉石二品

サラサ石

クハルツエン

一文字石

シーゲルスデーレン

アラレ母石

禹餘糧

石英一種

ウミホツス

水入石英

紫石英

魚紋石

ピコロステーン
カルク

ベルグケレイスタルメツト

スワーフルエイセルエン

エイセルニール
セイゲウス

ベルグケレイスタル
メツトワテル

アメチイスト

メルグシキルヘルメツト
ペトレヒシルテヒス

『岩崎灌園遺稿』にも、シーボルト関係手稿がある。『阿蘭陀質問草木』四丁である。内容は、灌園の質問に対するシーボルトの答である。すでに佐々木が解説しているが、(五)内容のすべてではないので、改めて紹介する。

『阿蘭陀質問草木』

シーボルト自筆 木綿ズキノ紙ナリ

此方ヨリ鉢植ヲ見セタルトキ植木ヘ付テ返シタル札ナリ

子ムノキ 富士産 Sorbu

地黄 Melitus

ダンドク功 Canna 葉功ナシカンナ

ミツデ功 Ararija Aralia

ミヤリンバイ功 Crataegus

ケイマ功不知

木豆毒アルヤ Hedyssarum

ヘデイサリユム
メトレイシヤリヒ



ナ、カマド Sorbus ソルビュス

また、『本草図説』五一巻には、「エンゲリヤ シュラドリ 天竺産腊葉荷蘭人シイボルト持来ル」とし、図を載せている。また巻二三上では「番紅花番名サフラン CROCUS SAFRAN 蘭画ウエインマン」とし、サフランの画を載せている。灌園は、宇田川玄真たゞとウインマン Johann Wilhelm Weinmann の『薬用植物図譜』^(六)蘭訳本の研究会をおこなひ、その関係の稿本を遺している。『本草図譜』にも、榕菴からウインマンの本を借りて模写した図が載っている。

ここで紹介したものは、西洋産自然物や西洋名(ラテン名、オランダ語名)に対する伝統的本草家灌園のなみなみならぬ関心を示しており、多くの伝統的本草家たちの関心についての例証の一つとなっている。^(九)

本手稿の閲覧の機会を与えて下さったことにつき、佐々木利和氏に感謝いたします。

文献および注

- (一) 森鷗外『鷗外全集』第一四巻、考証二、三三二～一九九頁、一九三六年。
- (二) 佐々木利和「博物館書目誌稿—帝室本之部 博物書篇—」『東京国立博物館紀要』第二二号、一三七～二五二頁、一九八六

年。

(三) 前出(一)一六八～一七七頁。

(四) 設楽貞丈甚左衛門と思われる。一七八五年生。本姓菅原。字は直之助。研芳園、芝陽は号。一、四〇〇石の幕臣。楮鞭会員。

灌園は馬場大介とともに、シーボルトと面会したといわれるが、設楽貞丈も一緒だったことが考えられる。

(五) 前出(一)一八二頁。

(六) *Taachyk register der plaat-afte figur-beschryvingen der bloem-dragende gewassen, 1736—48.*

(七) 研究会については『宇田川榕自叙年譜』に載っている。

(八) 『岩崎灌園遺稿』中の『ウインマン』二八丁、『ウエインマン産物草木目録』一冊、『ウインマン(図)附ドニウス(図)』三冊がある。帝室本で、前出(一)一八一～一八五頁参照。

(九) 矢部一郎「本草家は西洋植物学の何に関心をもちたか」『立正大学教養部紀要』第二〇号、一〇六～一二二頁、一九八七年。

矢部一郎「西洋植物学の影響と本草家の関心」『実学史研究』IV、八五～一一〇頁、思文閣出版、京都、一九八七年。

(立正大学教養部)